

歴史のおもしろさ

## ユニセフと「キュリー夫人」のつながり



「キュリー夫人」という伝記を読んだことはありますか？  
キュリー夫人はポーランド出身で、ノーベル賞を2度受賞（ノーベル物理学賞と化学賞）した世界的に有名な女性です。また、出身国のポーランドは、ユニセフが活動の基本とする「子どもの権利条約」の草案を起草し、国連で採択するよう働きかけた国としてよく知られています。

このキュリー夫人の次女として生まれた女性が、ユニセフの第2代事務局長だったヘンリー・ラブイス氏（在任は1965～1979年）と結婚したイヴ・キュリー・ラブイス夫人です。ラブイス夫人はユニセフの“First Lady”として夫君と共に多くの開発途上国を訪問。子どもたちへの支援と擁護を訴えました。また、ユニセフが1965年にノーベル平和賞を受賞した時、夫君のラブイス氏が事務局長でした。

ラブイス夫人は1904年にパリに生まれ、若い頃はピアニストとしてヨーロッパ中を演奏旅行し、第2次世界大戦中は戦争特派員として前線から記事を送るなど、ジャーナリストとして活躍しました。母親であるマリー・キュリー夫人の伝記著者としても知られています。

2007年10月22日、102歳でこの世を去りましたが、ユニセフ米国国内委員会の名誉理事を務めるなど、終生ユニセフに尽力されました。

「子どもの権利条約」の生みの親の国が輩出した世界的科学者の娘とユニセフとのつながり。歴史はおもしろいですね。イヴ・キュリー・ラブイス夫人のご冥福を心よりお祈りいたします。



©UNICEF/HQ05-0894/Nicole Toutounji  
ありし日のラブイス夫人（中央）  
アン・ベネマン ユニセフ事務局長（右）とともに

## 『ユニセフ年次報告』のご案内

『ユニセフ年次報告2006』は、2006年（1月1日～12月31日）の世界各地でのユニセフの活動の様子や、収入と支出、国ごとの予算配分、各国政府、民間のユニセフへの拠出額などを紹介した活動報告書です。

学校で取り組まれたユニセフ募金が実際にどのように世界各地で活用されているのかを知りたいときに有効な資料です。日本語版の巻末には、日本におけるユニセフ国内委員会である（財）日本ユニセフ協会の1年間の事業報告も掲載されています。最新の『ユニセフ年次報告2006』のポイントは右の通りです。ご活用ください。

『ユニセフ年次報告2006』日本語版をご希望の方には、1部まで郵送料ともに無料でご提供します。

（A4変型判50ページ）  
2冊目以上、1部120円）

■お申込み、お問い合わせは  
学校事業部へ

☎ 03-5789-2014

FAX 03-5789-2034

✉ se-jcu@unicef.or.jp



## 『ユニセフ年次報告2006』のポイント

## ■ 子どもとミレニアム開発目標（P2～P9）

- ・国際社会が世界の子どもさまざまな問題を2015年までに改善すると約束した「国際ミレニアム開発目標\*」の達成期限が近づいています。しかし、子どもたちの健全な成長は深刻な危機に晒されています。
- ・ユニセフは目標達成のために子どもの状況確認、パートナーシップの強化、子どもたちが参加する国際的なキャンペーンへの支援などにさらに力を入れています。

\*2000年9月に開催された国連ミレニアム・サミットで採択された国連ミレニアム宣言に示された課題と、90年代に採択された国際開発目標を共通の枠組みとしてまとめたもの。T・NET通信36号に一覧表を紹介。

## ■ 多くの道筋、ひとつの目的地（P10～P19）

- ・8つのミレニアム開発目標は互いに絡み合い、一体となって平和な世界へ向けた基盤をつくりあげるもので、目標はばらばらには達成することはできないものです。子どもの健全な成長のためには保健、教育、疾病対策、保護なども互いに切り離すことはできません。

## ■ パートナーシップの力（P20～P29）

- ・さまざまな組織、企業、多くの個人や子どもたちなど、ユニセフはパートナーシップの力を得て活動を進めています。

## ■ 運営と資源管理（P30～P45）

- ・2006年のユニセフの運営、支援物資調達、収入や支出状況を報告しています。

©UNICEF/HQ06-1067/Kate Brooks  
ユニセフの支援物資

